



日本植物病理学会ニュース 第79号

(2017年8月)

【評議員選挙電子投票のお知らせ】

平成30～31年度評議員選挙は電子投票により行います。電子投票を行えない方は、従来の郵送による投票も行えます。詳しくは、Journal of General Plant Pathology Vol. 83, No. 4 (2017年7月刊行)の折り込み、または、学会ホームページに掲載の選挙告示をご覧ください。

【名誉会員・永年会員の略歴とお話】

名誉会員 本田雄一



1941年9月17日、宮城県生まれ、1964年3月岩手大学農学部卒業、1966年3月東北大学大学院農学研究科修士課程修了、1969年3月同博士課程修了、農学博士、1969年4月農林省東北農業試験場農林技官、1976年10月総理府技官併任ハワイ大学客員教授（～1977年9月）、1984年5月農林水産省野菜試験場盛岡支場主任研究官、1985年4月島根大学農学部助教授、1990年4月島根大学農学部教授、1991年3月鳥取大学大学院連合農学研究科教授併任、1993年4月島根大学農学部長・同農学研究科長、1995年10月島根大学生物資源科学部教授・同学部長・同研究科長、2003年4月島根大学長、2004年4月国立大学法人島根大学長、2009年3月国立大学法人島根大学長退任・同大学名誉教授、2009年4月公立大学法人島根県立大学理事長・学長、2017年3月公立大学法人島根県立大学理事長・学長退任。受賞等：1977年4月日本植物病理学会学術奨励賞「イネごま葉枯病菌の胞子形成に対する光の作用に関する研究」、1984年4月科学技術庁長官賞「光質利用による農作物病害防除法の研究」、1998年5月日本植物病理学会賞「光質利用による病害防除の先駆的研究」。学会活動等：評議員（1998年4月～2006年3月）、関西部会長（2003年4月～04年3月）、島根県総合開発審議会会長

(2007年7月～09年7月)他。

著書：作物保護の新分野（日本植物防疫協会、1983）、光と植物生育（養賢堂、1984）、病害防除の新戦略（全国農村教育協会、1992）、植物と紫外線UVB（東北大学遺伝生態研究センター、2000）、日本植物病理学100年史（日本植物病理学会、2015）他、以上いずれも共著。

研究活動：東北大学大学院農学研究科では、オレゴン州立大学 Dr. Leach 及びハワイ大学 Dr. Aragaki との研究交流の下、「糸状菌の形態形成に及ぼす光環境の影響」について研究し、イネごま葉枯病菌の胞子形成が拮抗的に作用する青色光と紫外線によって調節されることとその光の作用スペクトルを明らかにした。同時に、胞子形成誘導光の有効波長である紫外線を除去するビニルフィルムで、幾つかの病気を防除できることを見出した。

この間、ご指導頂いた先生方、ご支援頂いた多くの上司、同僚の皆さんに心から感謝し御礼申し上げます。

名誉会員 稲葉忠興



1941年8月富山県生まれ。1964年3月三重大学農学部農学卒業。1964年4月農林省入省、農業技術研究所病理昆虫部病理科に配属。1975年11月～1976年10月科学技術庁長期在学研究員（ミネソタ大学）。1983年12月農業環境技術研究所環境生物部。1986年4月四国農業試験場病害研究室長。1989年5月農林水産省農林水産技術会議事務局に新設された研究交流管理官。1992年11月農業研究センター病虫害防除部長。1995年8月北海道農業試験場企画連絡室長。1997年7月北海道農業試験場長。2001年4月国立研究機関の独立行政法人への移行で誕生した独立行政法人農業技術研究機構副理事長。2003年9月退職。

主に、キュウリ・ハウレンソウ・ダイズ・トウモロコシのべと病の発生病態に関する研究を行った。キュウリべと病菌の分生孢子形成機構、ハウレンソウ・ダイズのべと病の種子伝染機構、ハウレンソウ・ダイズ・トウモロコシのべと病の全身発病機構を解明した。1975年農学博士（九州大学）、1975年日本植物病理学会学術奨励賞「キュウリべと病の病斑および孢子形成と宿主植物の光合成との関係に関する研究」、1995年日本植物病理学会賞「べと病菌の生理・生態に関する研究」。

学会活動：評議員、庶務幹事、病名委員。学会創立80周年記念「植物病理学事典」編集幹事長。2003年技術士農業部門・植物保護の新設（8月18日官報）に伴い、2004年から技術士対応委員会、5学会技術士育成推進委員会の委員長を6年間務めた。技術士資格取得の促進（目標100名）、「技術士（植物保護）の資質について」の策定を行った。技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナーを始めた。

著書：「新編農学大事典」（2004 養賢堂）、「植物病理学事典」（1995 養賢堂）、「感染の生化学」（1970 農業技術協会）、「微生物と農業」（1986 全農教）、「病害防除の新戦略」（1992 全農教）、「作物病原菌研究技法の基礎」（1995 日植防）、「種子伝染病の生態と防除」（1999 日植防）、いずれも共著・共編。

最後に、ご指導、ご協力をいただいた先輩、同僚、ならびに多くの学会員の皆様に心より感謝申し上げます。

名誉会員 加来久敏



1946年9月3日、福岡県生まれ、1972年佐賀大学農学研究科修士課程修了、1974年農林省入省、中国農業試験場 環境部 病害第一研究室配属、1980-81年米国ウイソコンシン大学客員研究員、1986年熱帯農業研究センターに異動し、IRRI イネ白葉枯病国際共同プロジェクトに参画、1992年農業生物資源研究所 遺伝資源第一部、2001年（独）農業生物資源研究所・遺伝資源研究グループ、2006年植物・微生物相互作用研究ユニット、同年7月（株）サカタのタネ研究顧問、現在に至る。

学位：「イネ白葉枯病に対するイネ品種の抵抗反応に関する研究」（東京大学）

受賞歴：日本植物病理学会 学術奨励賞（「イネ白葉枯病に対するイネ品種の抵抗反応に関する研究」）、論文賞

（「Red stripe of rice is caused by a bacterium *Microbacterium* sp.）, 学会賞（「植物病原細菌の遺伝的多様性及び感染機構に関する研究」）

著書：「植物病原細菌学」（養賢堂、2017）、「微生物の事典」（朝倉書店、2008、分担編集）、「植物病理学事典」（養賢堂、1995：分担執筆）、「IRRI, Bacterial blight of rice 分担執筆」など。

学会活動：庶務幹事長、評議員、植物病名委員会委員長、学会誌原著編集委員、ISPP 種子病理委員会委員、国際植物病原細菌学会委員など。

植物病理の研究事始めはイネ菌核病の病態解剖で、菌核の形態形成をライフワークとしたいと考えていたが、農林省（現在の農林水産省）入省後、与えられたテーマはイネ白葉枯病であった。いたく落胆したものの、その後、本病の病原細菌に対するイネ品種の反応の多様性の研究を推進した。しかし、研究者時代、最後までこの病原細菌に付き纏われた感あり。ウイソコンシン大学ではSequeira教授の研究室で病原細菌と宿主との相互作用研究に目覚め、1986年からIRRIとのイネ白葉枯病に関する共同研究で国際判別品種の育成や国際判別体系の構築に携わった。さらに、農業生物資源研究所に異動して、微生物の遺伝的多様性や微生物遺伝資源研究を展開、最後はイネ白葉枯病菌のゲノム解析に関わり、これが研究者としての締めの仕事となった。ゲノム解析は当時BACライブラリーとお古のシーケンサーで解析を始め、町工場のような体制で苦勞の連続であったが若い研究員とポスドクが中心となって邁進、論文発表は（同じ年ではあったが）韓国に先を越されたものの、発表論文はトムソン・ロイターのhot paperに選ばれた。この間、国際共同研究にも積極的にに関わり、米国やフィリピンでの長期在外研究のほか、JICA、二か国間等訪問した国は35を超えた。その後、種苗会社に移り、現在も耐病性育種や種子病理に関わり、業界での細菌の重要性を再認識している。細菌は研究のモデル系としても優れ、業界のみならず多方面で大きな問題を起こしている病原でありながら、なかなか理解され難い存在で、少しでも理解を深めていただこうと昨年「植物病原細菌学」を上梓した。

最後にご指導を賜った恩師・野中福次佐賀大学名誉教授や諸先輩、ご交宣・ご協力を賜った同僚・後輩各位に衷心より御礼申し上げますとともに、学会のますますの発展を祈念いたします。特に、モレキュラー研究の進展は目覚ましいものがありますが、植物-微生物相互作用解析における植物病理学独自の展開を期待しています。

永年会員 堀尾英弘



1942年岡山県生まれ。1964年に岡山大学農学部卒業。農林省に採用され、孀恋馬鈴薯原種農場（現：農研機構種苗管理センター孀恋農場）に配属された。1981年に北海道中央農場へ異動後は、孀恋・八岳・十勝農場に勤務して、1995年、孀恋農場長を最後に農場を離れ、海外勤務の後、1997年に農林水産省を退職。その後は公益法人に勤務して2012年に退職した。

研究活動の多くは、長く在籍した初任地でのもので、ウイルスフリー（VF）株作出のための莖頂培養は1966年の培養成功以来、多くの品種でVF株を作って原原種増殖体系に組み入れた。圃場での病株抜取り作業時に採取した原因不明株を調べる中で1967年に、日本で未発生の potato virus M を発見して診断・防除法を究明し、1971年には北海道の農場に発生した男爵薯のモザイク症状が potato virus S によることを明らかにした。1977年頃からは場内で被害が拡大していたジャガイモ粉状そうか病の防除試験に取り組んだ。本省の要請で、コンニャクに見られたモザイク症状の原因調査も行った。これらのうち、東京大学農学部の與良 清先生、土居養二先生のご指導で取りまとめた「ジャガイモ M モザイク病および S モザイク病に関する研究」により、1976年に東京大学から学位（農学博士）を取得した。また、新病害の防除法開発と原原種生産体系の確立に寄与したとして、1977年に農林大臣功績者表彰を受けた。JICAの海外技術協力で、1979年に「ウルグァイ野菜研究協力計画」専門家（ウイルス担当）として6ヵ月間、1995年に「インドネシア優良種子馬鈴薯増殖研修計画」のリーダーとして2年間派遣され、種馬鈴しょ増殖技術の移転に携わった。2012年の春には叙勲の栄に浴した。

最後に、これまでご指導・ご教示をいただいた東京大学農学部・北海道大学農学部の先生方、当時の植物ウイルス研究所をはじめ試験研究機関の方々、種苗管理センター及び農林水産省いも類担当課の皆様にご改めて感謝申し上げますとともに、本学会の益々のご発展を祈念致します。

永年会員 益子道生



1942年3月1日、大阪府生まれ。1965年島根県立島根農科大学農学部（現島根大学生物資源科学部）卒業、1969年大阪府立大学大学院農学研究科修士課程修了。

1970年塩野義製薬（株）に入社、油日ラボラトリーズに配属され、主として殺菌剤のスクリーニングを担当した。1980年農学博士（カンキツ潰瘍病に関する研究、京都大学）、1982年～1988年は塩野義製薬（株）の動植物開発部において殺菌剤、土壤消毒剤などの導入・導出・国内開発・技術普及などの業務に従事した。1988年11月、油日ラボラトリーズに戻り、新農薬の探索研究・開発研究に従事した。その過程でイソオキサゾール環を含む化合物から誘導されたメトキシイミノ酢酸アミド誘導体に幅広い殺菌活性を見だし、1989年に特許出願した。本化合物群は化学構造的にも生物活性的にも天然物由来のメトキシアクリル酸誘導体のストロビルリン系化合物と同じグループの化合物とみられる。化合物の最適化を経て、(E)-2-メトキシイミノ-N-メチル-2-(2-フェノキシフェニル)アセトアミド（一般名：メトミノストロビン、商標名；オリブライト®）がイネいもち病を対象に農薬登録され、さらにイネ紋枯病、葉鞘腐敗病、白葉枯病などにも適用拡大された。2001年「新規ストロビルリン系殺菌剤オリブライトの開発」により日本農薬学会業績賞（技術）を受賞した。

初期のスクリーニング試験において、本化合物のすべての対象病害に対する高い防除効果とスペクトラムの広さ、さらに特徴的な治療斑を目にした時の興奮が懐かしく思い出されます。また、特許出願後公開されるまでの約1年半の間のハラハラドキドキ感も今は懐かしい思い出です。

植物病理学を志して約50年、これまでご指導いただいた諸先生方や、一緒に研究した仲間へ心より感謝致します。とくにメトミノストロビンの評価試験を実施していただき、多くの助言をいただいた国や都道府県の農業試験場の先生方に厚く御礼申し上げます。同時に本学会の益々の発展をお祈り致します。

永年会員 松田安男



昭和15年3月18日鹿児島県生まれ、昭和37年3月鹿児島大学農学部農学科卒業、3月に新光製糖株式会社に入社、昭和42年3月に退社。同年4月に株式会社サカタのタネに入社後、試験場でトマト係となり昭和47年12月に君津育種農場へ移転。トマト及び病理を担当し、平成2年8月に同農場長、平成8年6月に種子生理研究室長、平成10年3月理事に就任、平成15年3月に退社。

研究歴、秋谷良三場長から与えられた課題はTOMV抵抗性育種素材親を見付け出し、複合抵抗性トマト品種の作出方法を確立することであった。

当時は菌を培養できる実験室はなかった。滝元清透先生にご指導頂き、簡易な施設での菌の分離及び増殖方法を教わり、連作ハウスでトマト栽培を行って、TOMV・萎凋病・葉かび病の接種源を確保できた。そこで国内、欧米のトマト品種について、幼菌検定の試験を開始した。その結果、葉かび病には罹病性で萎凋病には抵抗性があり、特にTOMVで接種葉にごくわずかな局部斑点があったが上葉は全く健全で、定植後も順調に生育し、しかも、この品種は、日本向きの桃色中玉品種であった。この品種を元にTOMV抵抗性品種の育苗を開始した。

公的研究機関では、TOMVの弱毒ウイルスの研究が行われ、防除効果があがっていた。TOMV抵抗性と思われるF₁品種の発表前にウイルス研究所の大島信行先生を訪問し、この品種はTm-2^a型をもつ品種であり、他にもTm-1、Tm-2型の品種があることを知った。

Tm-2型ヘテロのF₁品種では、弱毒ウイルス処理、TOMVのない接木栽培などで壞疽枯死、果実の壞疽症状が発生する恐れがあることを知らされた。既にこの時、各産地の長段取り栽培などで好成績が上がっていた(TVR-2「科学万博つくば'85」に展示された品種、瑞光など)。壞疽の解消には、Tm-2^aホモ、Tm-2^a/Tm-1型などのトマトF₁品種を作ると同時に台木トマトもTm-2^a・Tm-2型の遺伝子を持つ品種作りが急務であった。

昭和46年頃から暖地などで根腐萎凋病が冬期に発生し、高冷地では半身萎凋病・葉かび病も多発し、抵抗性品種の作出が急がれた。

昭和47年に君津育種農場の移転と同時に空調施設のある接種室を作り、いつでも幼菌検定が可能になり、効率的に安定したTOMV抵抗性をもち、複合抵抗性のある多く

のトマトF₁品種が作出できた。

最後にご指導及び育種素材親を提供して下さった多くの先生の皆様、ご協力いただいた先輩、同僚の皆様並びに多くの学会員の皆様に心より感謝申し上げますと共に、本学会が世界の為に更に貢献できる研究を期待しています。

永年会員 大橋祐子



1941年8月13日、東京生まれ。3才の時、愛知県岡崎市に疎開。1964年3月名古屋大学農学部農芸化学科生物化学教室卒業、1966年3月同大学院修士課程修了、1966年4月農林省植物ウイルス研究所研究員、1976年12月農林水産省農業生物資源研究所主任研究官、1989年10月同室長、1996年10月同上席研究官、2002年3月定年退職、2002年4月～2007年3月同特待研究員、2007年4月～2011年3月同有期雇用型契約職員。鳥取大学、東京農業大学、東京理科大学、京都大学、東京大学、新潟大学、明治大学などで特別講義。植物病理学会賞、科学技術長官賞、植物分子生物学会学術賞などの受賞。著書〔共著〕：植物の遺伝子発現（講談社サイエンティク、1995）、植物病理学（文永堂、2010）他。

植物が病傷害を受けたとき、どのような抵抗性を発揮するのか、を分子レベルで明らかにしたい、と研究を進めてきました。病気も傷害も生物にとっては致命的な災害に成り得ますが、植物は、両者に対して異なる情報伝達系を使って新たな遺伝子群を発現させ、身を守っていることが明らかになってきました。解明できたことはほんのわずかであり、この先の研究の進展に期待しています。これまで、皆様の寛容なご理解、ご援助のもとで、思いがけない発見も経験し、充実した楽しい研究生活を送ることができました。国際学会の開催などを通じて、広い視野でものを考えるには、国際的な交流が必須だ、と実感しています。子育てをしながらの厳しい生活で、留学など初めからあきらめていたのですが、今は、‘成せば成る、もっと積極的に行動すればよかった’と反省しきりです。若い方々が、現状に縛られず、高い目標を掲げ、よりよい環境に積極的に身を移し、質の高い、胸がどきどきするような楽しい研究を目指して頑張ってくださいませよう祈っています。

永年会員 玉田哲男



1941年11月10日北海道生まれ、1964年山形大学農学部卒業、同年北海道立中央農業試験場に勤務、1995年岡山大学資源生物科学研究所に勤務、2007年定年退職。現在ホクレン農業総合研究所顧問。

山形大学では、高橋喜夫先生のもとでいもち病菌の培養と接種試験を経験した。中央農試では上司の成田武四氏、馬場徹代氏によりウイルス病を担当するよう仰せつかり、北農研に在籍の大島信行氏から研究の手ほどきを受けた。1968年よりダイズ矮化病について研究を行い、病原ウイルス、アブラムシ伝搬、生態などについて明らかにした。当時北大に在籍の小島誠氏の指導によりウイルス粒子を精製し、抗体を作成したことは思い出深い。また大豆育種チームに協力し、ダイズ矮化病耐病性品種第1号「ツルコガネ」の育成にもささやかであるが貢献できた。1974年ダイズ矮化病の研究で北大から農学博士を授与（村山大記先生）。1979～1980年Bryan Harrison博士の招聘により英国スコットランド作物研究所に留学。ELISAによるジャガイモ葉巻病ウイルスの定量的解析を行った。Harrison先生からは、その後の研究にも貴重なアドバイスと激励をいただいた。

1984年道立農試におけるバイオテク研究の立ち上げに携わり、新設の生物工学部では、テンサイのそう根病（Rhizomania；BNYVV）を研究課題として取り上げた。特に開発したELISA検出法は、試験場や各糖業会社（日甜、北糖、ホクレン）が20年以上にわたり圃場診断や抵抗性検定のために利用している。

1995年岡山大学に移籍後もBNYVVの研究を継続。フランス（ストラスブール）のKen Richards博士のグループとの共同研究は、私自身ウイルスの分子機構を理解する上で学ぶことが多く、有意義であった。2016年イタリアのBiancardi氏との共著で「Rhizomania」を出版（Springer）：半世紀にわたる研究の歴史が記載されている。顧みると、試験場に勤めて間もなく2種の未知のウイルス病に遭遇した。アブラムシとポリミキサによって伝搬されるウイルス病である。植物ウイルス病にとって媒介生物の重要性は述べるまでもないが、ウイルスと媒介生物の間にみられる特異的で、巧妙なしくみは不思議でならない。ウイルスと宿主の関係と同様、媒介者を含めた3者の相互関係についての研究の発展をとくに期待したい。

【会員の動静】

1. 人事

(1) 大学関係

曾根輝雄	H28.8	北海道大学 大学院農学研究 院 連携研究部門 連携推進 分野 国際連携研究教育局 教授
煉谷裕太郎	H29.3	宇都宮大学 農学部 植物病 理学研究室 助教
難波成任	H29.4	東京大学 大学院農学生命科 学研究科 植物医科学研究室 特任教授
本橋慶一	H29.4	東京農業大学 国際食糧情報 学部 熱帯作物保護学研究室 教授
對馬誠也	H29.4	東京農業大学 生命科学部 植物共生微生物学研究室 嘱 託教授
廣岡裕吏	H29.4	法政大学 生命科学部 応用 植物科学科 専任講師
米山勝美	H29.4	明治大学 農学部 名誉教授
荒添貴之	H29.4	東京理科大学 理工学部 鎌 倉研究室 助教
北 宜裕	H29.4	日本大学 生物資源科学部 植物医科学研究室 教授
藤田佳克	H29.4	日本大学 生物資源科学部 植物医科学研究室 特任教授
入枝泰樹	H28.10	信州大学 学術研究院（農学 系）助教
日恵野綾香	H28.10	岐阜大学 流域圏科学研究セ ンター 菌類生態学研究室 研究員
峯 彰	H29.4	立命館大学 立命館グローバ ル・イノベーション研究機構 助教
大木 理	H29.3	[退職 大阪府立大学 生命 環境科学研究科 植物生体防 御学研究グループ 教授]
東條元昭	H29.4	大阪府立大学 生命環境科学 研究科 植物生体防御学研究 グループ 教授
岩本 豊	H29.4	神戸大学 農学研究科 客員 教授 准教授
村上二郎	H29.4	吉備国際大学 農学部 植物

		病理学研究室 准教授	清水健雄	H29.4	農研機構・果樹茶研究部門
山田晃嗣	H29.4	徳島大学 社会産業理工学研究部 生物資源生産学分野 助教			ブドウ・カキ研究領域 ブドウ・カキ病害虫ユニット 任期付研究員
望月 進	H28.12	香川大学 農学部・国際希少糖研究教育機構 助教	中保一浩	H29.4	農研機構・野菜花き研究部門 野菜病害虫・機能解析研究領域 病害ユニット ユニット長
飯山和弘	H29.1	九州大学 農学部 植物病理学研究室 准教授			
深田史美	H29.4	Max Planck Institute for Terrestrial Microbiology, Germany 博士研究員	(3) 都道府県試験研究機関関係		
(2) 農水省関連独法関係			河又 仁	H29.4	茨城県農業総合センター 生物工学研究所 所長
石黒 潔	H29.3	[退職 農研機構・東北農業研究センター 所長]	小河原孝司	H29.4	茨城県県南農林事務所 経営・普及部門 経営課 主査
寺見文宏	H29.3	[退職 農研機構・野菜花き研究部門 野菜病害虫・機能解析研究領域 病害ユニット ユニット長]	矢ヶ崎健治	H29.4	埼玉県農業技術研究センター 生産環境・安全管理研究担当 室長
越智 直	H28.10	農研機構・本部 経営戦略室 主任研	酒井和彦	H29.4	埼玉県農業技術研究センター 生産環境・安全管理研究担当 病害虫防除技術研究 担当部長
白川 隆	H29.4	農研機構・東北農業研究センター 企画部 部長	竹内 順	H29.4	東京都農林総合研究センター 園芸技術科 科長
若生忠幸	H29.4	農研機構・東北農業研究センター 畑作園芸研究領域 領域長	星 秀男	H29.4	東京都農林総合研究センター 研究企画室 主任研究員
今崎伊織	H29.4	農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 病害虫グループ 主任研	野村 研	H29.4	神奈川県農業技術センター 病害虫防除部 副技幹
達 瑞枝	H29.4	農研機構・東北農業研究センター 生産環境研究領域 病害虫グループ 研究員	原澤良栄	H29.4	新潟県農業総合研究所 所長
本多健一郎	H29.4	農研機構・中央農業研究センター 企画部 産学連携室 産学連携コーディネーター	桃井千巳	H29.4	富山県農林水産部 農業技術課 エコ農業推進係 主任
野口雅子	H29.4	農研機構・中央農業研究センター 企画部 企画室 企画チーム長	舟久保太一	H29.4	山梨県総合農業技術センター 研究管理監
松岡淳一	H29.4	農研機構・中央農業研究センター 水田利用研究領域 北陸病害虫防除グループ 研究員	石山佳幸	H29.4	長野県野菜花き試験場 佐久支場 技師
関口博之	H29.4	農研機構・西日本農業研究センター 生産環境研究領域 病害管理グループ 主任研	古田 岳	H29.4	長野県野菜花き試験場 環境部 技師
			外側正之	H29.4	静岡県農林技術研究所 病害虫防除所 病害虫班長
			伊代住浩幸	H29.4	静岡県農林技術研究所 植物保護科 上席研究員
			斉藤千温	H29.4	静岡県農林技術研究所 植物保護科 上席研究員
			鈴木幹彦	H29.4	静岡県農林技術研究所 茶業研究センター 生産環境科 上席研究員

田中弘太	H29.4	静岡県経済産業部農業局 地域農業課 主任	井手洋一	H29.4	佐賀県農林水産部 園芸課 環境保全型農業担当 係長
小出隆子	H29.4	愛知県尾張農林水産事務所 農業改良普及課 主任専門員	成富毅誌	H29.4	佐賀県農林水産部 園芸課 環境保全型農業担当 副主査
戸田浩子	H29.4	愛知県農業総合試験場 園芸研究部 花き研究室 主任研究員	田代暢哉	H29.4	佐賀県上場営農センター 畜産・果樹研究担当 主査
鈴木啓史	H29.4	三重県中央農業改良普及センター 普及企画室担い手課 主幹	正司和之	H29.4	佐賀県農業試験研究センター 環境農業部 土壌・肥料研究担当 副主査
中嶋香織	H29.4	三重県農業研究所 基盤技術研究室農産物安全安心研究課 主任研究員	山口純一郎	H29.4	佐賀県農業試験研究センター 白石分場 分場長
堀 祐輔	H29.4	京都府南丹農業改良普及センター 技師	尾松直志	H29.4	鹿児島県農業開発総合センター 生産環境部 病理昆虫研究室 室長
岩本 豊	H29.4	兵庫県立農林水産技術総合センター 農業技術センター 病害虫部 上席研究員	西 八東	H29.4	鹿児島県 曾於畑地かんがい 農業推進センター 農政普及課 主幹兼茶普及係長
井沼 崇	H29.4	和歌山県農林水産部 農業生産局果樹園芸課農業環境・鳥獣害対策室 主査	富濱 毅	H29.4	鹿児島県農業開発総合センター 生産環境部 病理昆虫研究室 研究専門員
増田吉彦	H29.4	和歌山県果樹試験場 副場長	中西善裕	H29.4	鹿児島県大隅加工技術研究センター 主任研究員
武田知明	H29.4	和歌山県果樹試験場 環境部 副主査研究員	河野伸二	H29.4	沖縄県農業研究センター 病虫管理技術開発班
村本和之	H29.4	山口県岩国農林事務所 主幹	北 宜裕	H29.3	[退職 神奈川県農業技術センター 所長]
鍛冶原寛	H29.4	山口県農林水産部 ぶちうまやまぐち推進課 主査	加藤公彦	H29.3	[退職 静岡県工業技術研究所 沼津工業技術支援センター]
中村友香	H29.4	山口県農林総合技術センター 柑きつ振興センター 研究員	田代暢哉	H29.3	[退職 佐賀県上場営農センター 所長]
犬伏要輔	H29.4	徳島県農林水産部 農山漁村振興課 主任	2. 学位取得者(課程博士・論文博士)		
生咲 巖	H29.4	香川県農業試験場果樹研究所 環境担当 主席研究員	小松 勉	H28.6	北海道大学 大学院農学院 博士(農学) ブドウつるの割細菌病の発生生態と防除に関する研究
山崎睦子	H29.4	高知県農業振興部 環境農業推進課 主幹	対馬大希	H29.3	岩手大学 連合農学研究科 博士(農学) ジャガイモやせいもウイルスの病原性に関する研究―病原性を制御する塩基変異とウイルス及び宿主スモール RNA の変動解析―
岡田知之	H29.4	高知県農業振興部 産地・流通支援課 主査	北沢優悟	H29.3	東京大学 大学院農学生命科
竹内繁治	H29.4	高知県農業技術センター 技術次長			
下元祥史	H29.4	高知県農業技術センター 生産環境課 病理担当 主任研究員			
山崎淳紀	H29.4	高知県農業技術センター 生産環境課 病理担当 研究員			

- 学研究科 博士(農学) 植物病原細菌の花き類に対する病原性に関する研究
- 桂馬拓也 H29.3 東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士(農学) フレキシウイルスの細胞間移行を阻害する劣性抵抗性遺伝子に関する研究
- 野村 研 H29.4 東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士(農学) ポティウイルス抵抗性植物の作出と解析
- 伊代住浩幸 H29.4 東京大学 大学院農学生命科学研究科 博士(農学) 植物のエリシター応答発光の発見とプライミング検出技術への応用に関する研究
- 有馬 忍 H29.2 東京農業大学 農学系研究科 博士(農学) 栽培きのこに発生する病害の病原特定, 発生生態および防除に関する研究
- 遠 瑞枝 H29.3 静岡大学 創造科学技術大学院 博士(農学) 植物に病害を起こす *Pseudomonas syringae* の2つの病原型に関する研究
- 安達広明 H29.3 名古屋大学 生命農学研究科 博士(農学) 植物免疫に関与する WRKY 型転写因子群による活性酸素生成機構
- 日恵野綾香 H28.9 岐阜大学 連合農学研究科 博士(農学) Studies on Abscisic Acid- and H₂O₂- Mediated Transcriptional Regulation Related to Defense Response to Pathogen in *Arabidopsis thaliana*
- 深田史美 H29.3 京都府立大 生命環境科学研究科 博士(農学) Significance of cell cycle regulation during appressorium development for the establishment of successful infection in *Colletotrichum orbiculare*
- 野見山孝司 H29.3 九州大学 生物資源環境科学府 博士(農学) レタスピック
- グベイン病に関与する2種の病原ウイルスと媒介菌の疫学的特性に関する研究
- 八坂亮佑 H29.3 鹿児島大学 大学院連合農学研究科 博士(農学) アブラナ科ウイルスの時間尺度と拡散経路に関する研究
- ### 3. 海外長期出張者
- 西川尚志 宇都宮大学 (H28.5~H29.3) 米国 パデュー大学植物学・植物病理学科
- #### 【新入会員情報】
- 湯田達也 鹿児島県農業開発総合センター 生産環境部 病理昆虫研究室 主任研究員
- 島田涼子 神奈川県農業技術センター 生産環境部 病害虫研究課
- 川原正見 日本曹達株式会社 札幌営業所 所長
- 平田賢司 法政大学 生命科学部 応用植物科学科
- 北畑信隆 東京理科大学 理工学部 応用生物科学科朽津研究室 助教
- 玉置大介 富山大学 大学院理工学研究部(理学)
- 柴田亜紀彦 丸和バイオケミカル株式会社 アグロ事業部 課長補佐
- Arafa Ramadan かずさDNA研究所 先端研究部 植物ゲノム・遺伝学研究室
- 會澤雅夫 農林水産省那覇植物防疫事務所
- 岡田 敦 日本農薬株式会社 経営企画部 経営企画グループチーフ補佐
- Parada Roxana 鳥取大学 農学部 生物資源環境学科 植物分子生物学研究室
- 白水 貴 三重大学 生物資源学研究科 植物医科学研究室
- 石賀貴子 筑波大学 生命環境科系 非常勤研究員
- 佐藤泰三 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農産園芸研究課 作物・機械担当 専門研究員
- 大野勝也 イビデン株式会社 技術開発本部開発部 バイオマテリアル開発 G
- 菱池政志 和歌山県農業試験場 環境部 主査研究員
- 松倉啓一郎 農研機構九州沖縄農業研究センター 生産環境研究領域 虫害グループ 主

松岡淳一 任研究員
農研機構中央農業研究センター（北陸拠点）水田利用領域 北陸病害虫防除グループ 研究員

【学会活動報告】

1. 大会開催報告

平成 29 年度日本植物病理学会大会は、例年より約 1 ヶ月遅い開催時期となりましたが、4 月 26 日（水）～28 日（金）の 3 日間にわたり岩手県盛岡市の「盛岡市民文化ホール（マリオス）」（総会会場）と「いわて県民情報交流センター（アイーナ）」（講演会会場）を会場に開催いたしました。本大会では、大会委員長を岩手大学農学部 吉川信幸、大会副委員長（プログラム委員長）を東北大学大学院農学研究科 高橋英樹先生、開催幹事長を岩手大学農学部 磯貝雅道先生、懇親会を岩手県病害虫防除所 猫塚修一氏、受付責任者を農研機構 果樹研究所 伊藤 伝氏が担当し、東北 6 県の会員が会場担当ならびに運営委員として開催準備と開催期間中の運営に当たりました。盛岡市での開催は平成 4 年以來の四半世紀ぶりでしたが、市内はちょうど桜の満開に当たり、全国からの参加者をお迎えする担当者としてはほっといたしました。

大会初日の午前中はマリオス・大ホールで総会が開催され、大会委員長ならびに桑田 茂会長挨拶と議事（平成 28 年度会務報告と平成 29 年度会務案）の後、夏秋知英新会長、久保康之新副会長の挨拶、名誉会員・永年会員推挙状の授与、学会賞・学術奨励賞・論文賞の授与に続いて、夏秋新会長の会長講演（「ワクチン」の未来）と 3 名の学会賞受賞者（石川雅之氏、岩井 久氏、鈴木信弘氏）の受賞講演が行われました（写真 1）。



写真 1：総会の様子

午後からは、学術奨励賞受賞者（石賀康博氏、越智 直氏、山岸菜穂氏）の講演に続き、一般講演がスタートいたしました。初日の夜の懇親会は、ホテルメトロポリタン盛岡・ニューウイングに会場を移し、「ミスさんさ踊り・さんさ太鼓連」による「盛岡さんさ踊り」の実演に始まり、高橋 壮名誉会員（岩手大学名誉教授）の乾杯の音頭により盛大に開催されました。岩手県産の素材を生かした料理と盛岡 3 大麺（「わんこそば」、冷麺、じゃじゃ麺）、地酒など盛岡の食文化に触れていただけたと思います。

3 日間の大会期間中は、第 1 会場から第 5 会場を、岩手県を除く東北 5 県の各県の会員が担当いたしました。各会場は非常にチームワークが良かったようで、一部プロジェクトの不具合があったと聞いていますが、講演は予定通り進行できました。大会 3 日目の閉会式で、次期開催地の神戸大学 土佐幸雄先生にバトンタッチし、大会を終了いたしました。本大会の参加者は 805 名（懇親会 468 名）で、講演題数は 350 でした。

本大会では、いたらない点も多々あったかと思いますが、大きなトラブルは無かったと聞いております。これもひとえに、会長を初めとする学会役員、座長や学生優秀発表賞の審査員をお引き受けいただいた先生と評議員の皆様、大会参加者の皆様、協賛や展示にご協力いただきました団体、また開催準備と運営にあたった東北部会会員の皆様のご支援・ご協力の賜物と存じます。あらためて、厚くお礼申し上げます。（大会委員長 吉川信幸）

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第 27 回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム報告

第 27 回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、平成 29 年 4 月 29 日にアイーナ・いわて県民情報交流センター（盛岡市）で開催された。公的研究機関、大学、農薬メーカーおよび農業団体などから 160 名の参加をいただき、会場は満席で急ぎ増席するほどの盛況ぶりとなった（写真 2）。

開催地の岩手県からは、菅 広和氏（岩手県農業研究センター、現 岩手県農林水産部）に水稲病害（もみ枯細菌病、いもち病）における殺菌剤耐性菌の発生経過と対応状況についてご講演いただいた。同県では、QoI 剤を採用した当初から耐性菌の発生を警戒し、MBI-D 剤耐性菌等への対応で得られた教訓から箱剤の連用防止、採種圃および周辺圃場における QoI 剤の使用禁止、育苗施設周辺の伝染源の撤去など関係機関が連携して発生回避に努めており、現在まで QoI 剤耐性いもち病菌は未検出であることが紹介された。続いて、2015 年に QoI 剤耐性いもち病菌が確認された秋田県における発生状況と対応について藤井直哉氏



写真2：会場の様子

(秋田県農業試験場)からご紹介をいただいた。QoI 剤耐性菌が発生した圃場を対象にアンケート調査を行った結果、耐性菌の発生要因は本剤の連用や周辺圃場からの伝染など4つのパターンに類別されたこと、関係機関の情報共有により迅速に対応できたこと、今後は採種圃の団地化が課題であること等が紹介された。

新規殺菌剤の関係では、以下の2剤についてご紹介をいただいた。久池井豊氏(デュボン・プロダクション・アグリサイエンス株式会社)からは、オキサチアピプロリンの物理化学的性状、作用特性、作用機構およびジャガイモ疫病菌における感受性検定方法を解説していただいた。本剤は、新規の殺菌機構を有しており、FRAC(殺菌剤耐性菌対策委員会)においてはコード49、耐性菌の発生リスクは中～高に分類されている。このため、メーカーでは耐性菌管理の具体的な対策として、国内では初めて製品ラベルにFRACコード番号と耐性菌管理方針を記載した点が注目された。また、渡辺慎也氏(日本曹達株式会社)からは、ピカルプトラゾクスの物理化学的性状、作用特性とピシウム属菌およびキュウリベと病菌における感受性検定方法を解説いただいた。

後半の2課題は果樹病害についてご講演いただいた。柳沼久美子氏(福島県農業総合センター果樹研究所)からは、福島県におけるモモせん孔細菌病の発生状況と防除の現状についてご紹介いただいた。本病に使用可能な殺菌剤の種類は少なく、無機銅剤や抗生物質剤が中心であるが、無機銅剤は薬害の問題から生育期間中の使用が難しいため、抗生物質剤に頼らざるを得ない。このような背景の下で、ストレプトマイシン剤耐性菌が1987年に確認されて以降、防除指針からの本剤の削除、再記載、使用基準(収穫前日数)の見直しなどへの対応経過とともに、春型枝病斑の切除などの耕種的対策を組み合わせた総合防除の取り組み状況についてご紹介いただいた。次に、赤平知也氏(青森県

産業技術センターりんご研究所)から、青森県におけるDMI剤耐性リンゴ黒星病菌の発生実態と対応策についてご紹介をいただいた。同県では黒星病が2015、2016年に連続して多発生したが、その要因には本病に対する主要な殺菌剤として位置づけられていたDMI剤の効力低下、多発園地における病原菌密度の上昇、開花前の早期感染などが関与していることが明らかになった。この結果を踏まえ、本年度からはDMI剤の使用を県下で全面的に中止し、代替薬剤の使用とそれに伴う防除間隔の見直し、リンゴ芽出し期の特別散布、耕種的防除の積極的推進による「non-DMIs 防除体系」などを提案し、取り組む予定であることが紹介された。

本研究会ではこれまでにMBI-D剤、QoI剤、SDHI剤およびCAA剤について使用ガイドラインを策定、公表してきたが、今回のシンポジウムでは、新たにDMI剤のガイドラインを公表した。稲田 稔幹事長(佐賀県農業技術防除センター)が、DMI剤耐性菌の現状、耐性機構の特徴およびガイドラインの内容について説明し、本剤を今後も長く現場で有効活用出来るよう防除暦等を作成する際の参考にしてほしいと呼びかけた。会場の参加者から多数のご意見をいただき関心の高さが伺えた。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、講演者および参加者の皆様に改めて厚くお礼申し上げる。なお、次回のシンポジウムは平成30年3月28日に神戸大学で開催予定であり、今回に続いて皆様の積極的な参加をお願いしたい。

(渡辺秀樹)

(2) 第17回植物病原菌類談話会

第17回植物病原菌類談話会は、平成29年度植物病理学会大会終了後の平成29年4月28日の14:30～16:40にかけて、岩手県民情報交流センター・アイーナホールにて開催された。大学、公立の試験研究機関、独立行政法人、植物検疫機関、農薬メーカー、種苗会社及び農業団体など、学生・研究者127名の参加があった(写真3)。

今回の談話会のコーディネーターは、福岡県農林業総合試験場の梶谷裕二氏が務め、「忍び寄る病原菌の影！果樹病原菌の華麗なる感染戦略—おまえは、すでに感染している！」というテーマの下、3題の講演が行われた。演者およびその講演題目は、中村 仁氏(農研機構・果樹茶業研究部門)「果樹腐朽病害における病原菌の感染・発病戦略～ナシ萎縮病を中心に～」、梶谷裕二氏「イチジク株枯病やブドウ枝膨病で観察される病原菌の感染戦略」、八重樫元氏(農研機構・果樹茶業研究部門)「果樹白紋羽病菌に対するマイコウイルスの感染・移行戦略」であった。果樹



写真3：会場の様子

病害は病原体感染後の潜在期間が長く、発病までに長い時間を要するため、診断が難しい。ナシ萎縮病は、病徴が現れるころには腐朽が進行しているだけでなく、病原として報告のない複数の担子菌が材質腐朽に関与するなどの講演内容は、本講演を拝聴して初めて知る内容であった。また、感染後1年近く経過した後に病徴を発現する、イチジク株枯病とブドウ枝膨病の感染経路や防除対策に関する講演は、他の未解決の果樹や樹木の病害診断や防除対策にヒントを与えてくれるものであった。さらに、菌類病に携わる方は視野に入れておきたいマイコウイルスについて、生物防除法の確立を目指した白紋羽病菌のマイコウイルスを題材にわかりやすく解説していただいた。

また、話題提供として安藤勝彦氏（製品評価技術基盤機構）より「生物多様性条約並びに名古屋議定書のもとでの海外遺伝資源へのアクセスとその移動」について解説していただいた。1993年に発効された生物多様性条約のもと、2014年には名古屋議定書が発効され、このルールに基づいた他国の遺伝資源の取り扱いについて、ルールと注意事項、様々な可能性が解説された。また、この発効以前に得た遺伝資源の取り扱いについても発表があり、会場からはこの解釈について活発な質問や討議がなされたことから植物病理学研究上の問題点を共有できた。

本談話会の開催準備の段階から多大なご支援をいただいた、岩手大学の大会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせて本談話会の開催を予定しています。（渡辺京子）

(3) 技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナー

平成29年度技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナーは、日本植物病理学会大会（アイーナ・いわて県民情報交流センター）の会場にて、第2日目（4月27日）に、当学会技術士対応委員会主催のもと開催された。本セミ

ナーの準備と開催に当たっては、大会委員長をはじめとする大会運営委員会の皆様にご配慮をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

今年度はセミナー第一部の開始時間を早め（12:30～13:20）ランチョンセミナーとして開催した。引き続き第二部（13:30～14:40）を行い、技術士第一次試験と第二次試験のそれぞれを目指す方々の受講に配慮した。第一部では、桑田茂技術士対応委員長より技術士制度と本会の取り組み等について紹介がなされ、技術士対応委員の濱本宏氏（法政大学生命科学部）が、技術士制度概要と第一次試験（農業部門）の概略と受験申込みの手順などについて説明した。次いで新合格者の安井理美氏（法政大学大学院理工学研究科）より、第一次試験合格体験として受験の動機、勉強法、当日の心掛け等の話を伺った。第一部の最後に、安井氏に加え菅原敬氏（山形県病害虫防除所庄内支所）、大島研郎氏（法政大学生命科学部）を交え、昨年度の第一次試験問題等を用いながら質疑応答・ディスカッションを行った。受験勉強に使用された教科書、参考書などのことも含め様々な質問が出され、活発な議論が行われた。第二部では、桑田委員長が技術士二次試験合格者数等の現況を説明され、次いで鍵和田聡氏（法政大学生命科学部）より第二次試験の概略と受験申込みの手順等について説明があった。続いて、本年度は先ず「技術士受験にあたって」として、中島隆氏（農研機構九州沖縄農研）より、受験の動機づけから今後の技術士資格の活用まで話していただいた。次いで本年度の合格者である前島健作氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）から、第2次試験対策のポイントとして業務経歴票作成、勉強法、筆記試験と口頭試験の当日のことまで解説があった。最後に、佐藤裕氏（秋田県果樹試験場）、大上大輔氏（ホクレン農業協同組合連合会）と、本年度合格者である蓮沼奈香子氏（日産化学工業株式会社）、神頭武嗣氏（兵庫県立農林水産技術総合センター）を交えて、質疑応答、ディスカッションを行った。またその際に、文科省技術士分科会の「今後の技術士制度の在り方について」にある、試験制度の見直しや技術部門・選択科目見直し等についても簡単な説明があった。今回は、具体的な受験に関する質問だけでなく、技術士制度の活用に関する質問や議論まで幅広い質疑応答が行われ、盛況のうちにセミナーを終了した。なお、本セミナーで配布した資料は、これまでに開催したセミナーの資料とともに会員限定で配布されている。日本植物病理学会のホームページの「技術士」の項を参照していただきたい。

本セミナーは6年連続、第7回目の開催で、参加者は企業、大学、試験研究機関等から33名であった。本年は特

に若い人に参加していただき、技術士制度に新たに関心を持ってもらうことを期待しランチョンセミナーの形にしたが、例年に比べ参加者が少なくなった。いただいたアンケートの中にも指摘されていたが、セミナーの周知等に工夫が必要であると感じた。末筆となったが、参加者並びに講演者に対し、主催者一同心よりお礼を申し上げる次第である。

(濱本 宏)

3. 技術士対応委員会

平成28年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）で10名が合格

平成29年3月1日に平成28年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）の合格者が発表されました。次の10名の方が合格されました（敬称略・ご所属は本年3月時点のもの）。

藤山正康（日産化学工業株式会社）、前島健作（東京大学大学院農学生命科学研究科；本会会員）、蓮沼奈香子（日産化学工業株式会社；本会会員）、椎葉岳彦（茨城県県央農林事務所 経営・普及部門；本会会員）、大橋俊子（茨城県病害虫防除所）、石川 亮（住化グリーン株式会社；本会会員）、小谷和宏（鳥取県西部総合事務所日野振興センター；本会会員）、神頭武嗣（兵庫県立農林水産技術総合センター；本会会員）、山塚裕美（宮崎県立農業大学校）、菅 康弘（長崎県農林技術開発センター；本会会員）。

今回の合格者を合わせ、技術士第二次試験（農業部門・植物保護）合格者は計113名となりました。引き続き、試験研究機関や民間企業、大学など、多様な組織から多くの方の受験をお願いします。平成29年度の技術士第一次試験は平成29年10月8日（日）に行われます（受験申し込みは7月上旬に締め切られています）。また、技術士第二次試験の筆記試験は平成29年7月17日（月・祝）に行われました。詳細は日本技術士会のホームページの試験・登録情報から、試験の実施案内をご確認ください。平成29年度も多く技術士（農業部門・植物保護）の誕生を期待しています。

【学会活動予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日程：平成29年10月19日（木）～20日（金）

場所：北海道農業研究センター（札幌市）

(2) 東北部会

日程：平成29年9月28日（木）～29日（金）

場所：弘前大学（弘前市）

(3) 関東部会

日程：平成29年9月22日（金）～23日（土）

場所：横浜国立大学（横浜市）

(4) 関西部会

日程：平成29年9月19日（火）～20日（水）

場所：大阪府立大学（堺市）

(5) 九州部会

日程：平成29年11月8日（水）～9日（木）

場所：沖縄県立博物館（那覇市）

2. 談話会・研究会等

(1) 平成29年度植物感染生理談話会

日程：平成29年7月27日（木）～29日（土）

場所：熱川ハイツ（東伊豆町）

(2) 第13回植物病害診断教育プログラム

日程：平成29年9月11日（月）～15日（金）

場所：佐賀大学（佐賀市）

(3) EBC研究会ワークショップ2017（第13回）

日程：平成29年9月15日（金）

場所：東京大学（文京区）

(4) 第11回植物病害診断研究会

日程：平成29年11月15日（水）～16日（木）

場所：十勝農協連ビル（帯広市）

【会員の関連学会等における受章のお知らせ】

白石友紀氏（岡山県農林水産総合センター・生物科学研究所・所長、岡山大学名誉教授）が平成29年度日本農学賞・第54回読売農学賞を受賞されました。日本農学賞は、日本の農学研究者における最高の榮譽ある賞として大正14年に創設された賞です。また、読売農学賞は、日本農学賞の受賞者から選出される賞で、昭和39年に創設された賞です。受賞の対象となった研究業績は、「植物細胞壁を介する病原菌認識機構に関する研究」です。

深田史美氏（京都府立大学）が第7回（平成28年度）日本学術振興会有志賞を受賞されました。本賞は、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程学生を顕彰する目的で創設された賞です。受賞の対象となった研究業績は、「植物病原糸状菌における細胞周期と植物感染制御機構に関する研究」です。

【関連学会情報】

第32回報農会シンポジウム

『植物保護ハイビジョン—2017』のご案内

—加速するグローバル化に対応する IPM の進展—

趣 旨：グローバル化の加速が国外農産物の貿易圧力や病害虫の侵入・定着リスクの上昇を招いている。一方で、不安定さを増す国際情勢や拡大する気候変動からは食料自給率の向上・確保の必要性が高まっている。国際競争力を高めながら持続可能な農業を堅持するには、生産コストの削減と生産物の高品質・高付加価値化が不可欠であろう。植物保護分野ではこの難問解決にあたって、IPMを「絵に描いた餅」から「生産現場の切り札」に展開すべく努力が続けられている。

主 催：公益財団法人 報農会

協 賛：日本応用動物昆虫学会，日本植物病理学会，日本農業学会，日本雑草学会

日 時：平成29年9月13日（水）10:00～17:00

場 所：「北とぴあ」つつじホール（東京都北区王子1-11-1）

TEL 03-5390-1100（会場への連絡は出来ません）

JR 京浜東北線・地下鉄南北線：王子駅下車，北口改札より徒歩2分

開 会：10:00～10:15 挨拶

理事長 田付貞洋

講 演：10:15～11:05 農薬登録の国際調和

農林水産省農薬対策室

古畑 徹

11:05～11:55 海外での病害虫発生と生物農薬の使用・IPMの現場について

三井物産（株）アグリサイエンス事業部 平田秀嗣

11:55～13:00 昼食・休憩

13:00～13:50 侵入害虫クビアカツヤカミキリの被害状況と防除対策

森林研究・整備機構森林総合研究所 加賀谷悦子

13:50～14:40 アミノ酸による作物の病害抵抗性誘導

農研機構生物機能利用研究部門 瀬尾茂美

14:50～15:40 Bacillus 属等微生物を用いた病害防除とその展望

農研機構中央農業研究センター

吉田重信

15:45～16:45 総合討論

参加費：一般 2,000 円

学生 事前申込み無料，当日 1,000 円

申込み：参加をご希望の方は，9月6日までに下記連絡先までEメールまたはFAXで所属・連絡先と氏名をお知らせ下さい。当日，参加費と引き換えにテキストをお渡し致します。なお，当日の参加も可能です。

連絡先：公益財団法人 報農会

事務局：藤田肖子，渡邊敦子

〒187-0003 東京都小平市花小金井南町 1-12-11

BLOSSOM みさと

TEL/FAX 042-452-7773

E-mail: khono511@car.ocn.ne.jp

【書評】

西尾 健 監修 堀江博道／橋本光司／鍵和田 聡 編著
植物医科学の世界—植物障害の診断を極め，食料・環境の未来を拓く—

B5判，391頁

2017年4月30日，大誠社

ISBN：978-4-86518-073-2 C3645 定価 6,481円＋税

この度，法政大学植物医科学センターより，植物医科学叢書の第4弾となる「植物医科学の世界」が出版されました。

これまで世に送り出された同センターによる一連の書籍は，現場で即使えることを重点に内容や構成が作り込まれています。今回，届いたテキストを手にした時，この基本理念は継承されながらも，従来の叢書とはやや趣旨が異なることを直感しました。つまり，最初の叢書である「植物病原菌類の見分け方」と，続く第2弾の「植物医科学実験マニュアル」は，いずれも「実験指南書」的な性質が強かったと思われます。一方，本書は，大学での教科書として活用すべきことを念頭に編纂されつつも，それを越えて，既刊の実験書を使いこなし，生産現場で活動する技術者が存分に力を発揮するための司令塔のような役割を持たせているように感じています。

今さら言うまでもありませんが，植物に発生する生育異



常は、様々な症状を示し、決して図鑑通り、教科書通りではなく、よく言われる「典型的病徴（症状）」には、そうお目にかかれるものではありません。若い技術者にとっては、アブラナ科野菜に発生する根こぶ病と、ネコブセンチュウによる被害は明確に区別することさえ難しく、それどころか、マメ類の根に見られる根瘤とさえ混同することもあると聞いたことがあります。これらは決して笑い話ではありません。その違いを明確に、誰でもわかるように答えられるかと言えば、私自身危ういものがあります。

それではもう少しハードルを上げて、トマトの褐色根腐病とネグサレセンチュウの被害を瞬時に、かつ的確に判別するポイントはどうでしょうか？ フザリウム属菌による維管束褐変とパーティシリウム属菌による維管束褐変のそれぞれの特徴と区分点は？ 最近、私が出会った事例として、外見的症状はどう見ても細菌病、あるいはウイルス感染による「えそ症状」で疑いの余地がないトマト葉の異常症状が、病理学的検証を繰り返してもまったく病原は検出されず、さらに原因を追及した結果、実は深層土壌における極度のマンガン過剰による生理障害であることが明らかとなりました。現場での診断には多少の知見と経験もありましたが、現場での診断技術の研鑽にはまだまだ終わらないことを痛感しました。

このように、現場での診断では多くの事例に遭遇し、さらに予想外の要因が関与していることが珍しくありませんが、課題解決へのアプローチやプロセスは、その個々の技術者の独自の感覚により維持、または組織ごとに継承されており、統一的に整理することは困難であったのが事実です。しかしながら、それぞれの知見や経験が一つの学問として体系化され、共有化されることは、全国の技術者の永年の切望であり、それが植物医科学という新しい分野が提唱・創設されるに至った経緯です。

法政大学植物医科学センターによる一連の叢書は、執筆・編集・監修を担われた先生方とともに、現場で活躍してきた多くの技術者の写真や原稿が多数寄稿されています。つまり、各地のベテラン技術者が長年培ってきた現場での知見やテクニックを、わかりやすく体系的にまとめ、全国で活躍する現場の技術者の想いを一つにまとめた書物となっています。このような書籍を教科書として採用すること自体もまったく新しい取り組みとされます。

もう一点、本書を監修された西尾先生は、冒頭に「これまで、生産現場における植物防疫体制は、病害、虫害など特定の専門性に秀でた専任研究員が一つの組織に集合して課題の解決に当たってきたが、近年の異分野間での人事交流、組織の統廃合、人員削減などにより各分野の専門的技

術者を配置することが難しくなっており、そのような中、総合診療医に似た能力を持つ人材育成が急務である」と述べられています。

私自身、地方の試験研究機関や病害虫防除所で、一貫して現場での病害虫診断・同定業務や防除対策の構築・実践に従事し、勤務地は島しょ地域にまで及びましたが、いずれの生産現場でも、生産阻害要因が病原微生物である事例、すなわち「病気」は半数程度ではないでしょうか。あとの半数は、虫害であったり、あるいは薬害、最も悩ましいのは肥料、微量要素やガス害などに起因する生理障害でした。

先に書きましたように、実際の生産現場では様々な要因により、植物の生育異常が発生します。しかし、生産者にとって重要なことは、その要因が病気なのか虫害なのか、あるいは生理障害なのかといった、生産阻害の根本原因と対処法であり、診断に当たった技術者の専門性や見解を求めている訳ではないのです。

一つの事例として、生産者から「病気であるか？」との問いに、「病気ではありません」と答えます。当然生産者は「では何が原因か？」と聞き返す訳ですが、「病気以外は専門でないのでわかりません。とにかく病気ではありません」

このような問答は、私の身の回りにおいても決して特異なことではなく、これが西尾先生の執筆にある「特定の専門性に秀でた専任研究員が一つの組織に集合して課題の解決に当たってきた」ことについてのある種の弊害なのだと思います。

先に書きましたトマト葉の生育異常は、菌類・細菌類の分離を繰り返し、ウイルス検定も実施しましたが、すべて空振り、さらにウイルス学の権威であられる、ある大学の先生にご意見を伺い、疑われる病原ウイルスの検出をお願いしましたが、それでも陰性でありました。私が植物病理という専門性に固執するならば、診断はここまでであり、トマト生育異常は原因が究明されるまでさらに時間を要したでしょう。しかし、一連の診断プロセスから、現場に立ち戻り、圃場内で症状に感染性が認められないことから、生理障害の面から再度アプローチし、異常植物体の保持と、栽培終了後にバックホーで栽培土壌を層ごとの1mまで掘り下げ、採取土壌を私どもの土壌肥料研究チームにて分析を行い、ようやく原因究明に到達しました。

少々大仰に書きましたが、このようなことは現場で診断に当たっている多くの技術者は当たり前のように行ってきたことです。しかし、いま改めて思うこととして、現場の技術者に求められる本当の資質とは「生産阻害の原因をとことん追及すること」であり、それは病害、虫害、その他

生理障害の垣根を越えた、一切切の生産阻害要因を横断的に包括し、自身で診断する高い意識を持ちながら、時に異分野を総合的にコーディネートできる人望・人脈と考えます。

このような理念に基づき、植物医科学に関する叢書の出版が積み重ねられ、ついに本書をもって、植物医科学という学問の俯瞰とその普及へと、さらなる発展に傾注される先生方の想いが明確に示されたと思います。（星 秀男）

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、鈴木文彦、池田健太郎、平塚和之、山内智史

編集後記

学会ニュース第79号をお届けします。本号は、今年度推薦された名誉会員と永年会員のご紹介、会員の動静、大会などの学会活動の報告等々、盛りだくさんの記事を掲載しました。

新しく3名の皆様が名誉会員に、5名の皆様が永年会員に選ばれました。学会への多大なご貢献に深く感謝申し上げますとともに、植物病理学、病害防除、農業技術開発などにおける国内外での永年にわたる精力的なご活躍に対して敬意を表したいと思います。

今春も多くの方々に異動がありました。ご退職された皆様、長い間大変お疲れさまでした。職場やポストが変わら

れた皆様、心機一転、新しい仕事での益々のご活躍を祈念しております。学位を取得された皆様と新たに会員とられた皆様をご紹介しました。皆さまの今後さらなるご活躍を期待しております。

大会は例年よりほぼ1ヶ月遅れで4月末に開催されました。開催地の盛岡は桜が満開で800名を越す多数の参加者で大会は盛会裡に行われました。開催準備、運営にご尽力いただきました吉川信幸先生、高橋英樹先生をはじめ、東北部会会員などの関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。

大会のサテライトとして、殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムと植物病原菌談話会が開催されました。どちらの集いも興味深い講演や話題提供が行われ、それについて熱心に議論、質疑が交わされたことが伺い知れます。同じく大会期間中に技術士試験対策セミナーが開かれました。今回はランチョンセミナーで開始する工夫を凝らし、技術士制度の活用などを含め幅広い質疑応答が行われたようです。なお、技術士委員会の報告では昨年度は新たに10名の方が技術士に合格したとのことで大変喜ばしい限りです。今年度も多くの方が技術士に合格されることを期待します。

年末までの学会活動の主な予定を掲載しました。部会や談話会・研究会など多くの集いが開催されます。奮ってご参加いただきますようご案内申し上げます。

喜ばしいお知らせです。白石友紀先生が日本農学賞・読売農学賞を受賞されました。また、深田史美さんが日本学術振興会有志賞を受賞されました。誠におめでとうございます。

今年4月に法政大学植物医科学センターから出版された「植物医科学の世界」を星 秀男氏にご紹介いただきました。新しい学問分野として提唱・創設された植物医科学を俯瞰する本書は、教科書としての利用にとどまらず、農業現場における植物生育障害への対処にきわめて有用な技術書であることを説得力高く解説していただきました。植物病理や病害防除など植物生育障害に関わる多くの方々に広く活用されるのではないのでしょうか。（高橋賢司）